

## 故中村福治教授を悼む

故中村福治先生の『立命館国際関係』追悼号が中村先生を知る多くの方々からの貴重な寄稿によって、発刊されることになり、感慨深いものがあります。この追悼号の発刊によって、改めて中村先生の業績や人となりを知ることができると思います。ここでは、「中村福治先生の死を悼む」という昨年書いた旧文を再録させていただき、改めて追悼の意を表したいと思います。

穏かな初冬の通勤電車のなかで、ふと吊り下げ広告を見ると、ある雑誌の広告が目飛び込んできた。そこには、「理想の死に方」とあった。50代半ばを越えると、いつしか訪れるであろう『死』を考えることもあるが、日常生活の忙しさに追われていると、まだ実感がないのが現実である。「理想の死に方」は、個人によっても様々に違うであろう。多くは天寿をまっとうし、苦痛もなく息をひきとることを望むし、ある人は好きな音楽を聴きながら、また好きな食べ物をお腹いっぱい食べ、さらには好きな風景を眺めながら死を迎えることを望むかもしれない。

故中村福治先生の「お別れ会」が終わって、もう1ヶ月が過ぎようとしている。「お別れ会」の最後に、中村先生の奥様が語られた「中村は岸和田、小樽、仙台、京都、韓国を風のように舞い、風のように自由に生きた」という趣旨の言葉を述べられたが、風のように自由に舞い、飛び去っていったことが、先生にとっての「理想の死に方」に通じる「理想の生き方」だったのかもしれない。では、自分にとっての「理想の死に方」とはどんなものなのかが相応しいのだろうか。こんな思いが電車のなかでふと過ぎた。

以下の拙文は、「お別れ会」の当日に読み上げた「お別れの言葉」である。中村先生のご冥福を、今一度お祈り申し上げたい。

### お別れのことば

故中村福治先生の「お別れ会」にのぞみ、国際関係学部を代表して、謹んで哀悼の意を表します。

中村先生との悲しい別れが、こんなにも早く訪れることを誰が予期したことでありましょうか。10日前に病室で長時間語り合ったことが、最後の別れとなってしまいました。

中村先生は10年前に、経営学部から我が国際関係学部に移籍されました。実は、15年ほど前、

国際関係学部の「専門朝鮮語」の授業に若い学生と肩を並べて、熱心に聴講されている姿をお見かけし、先生の真摯な態度に感銘を受けたことがありました。この時期はちょうど先生が「日本経済史」研究から研究テーマを「韓国研究」に変更したころと重なります。

移籍後は学部主事や評議員などの役職を歴任しながら、韓国の政治や文化に対する研究に力を入れ、多くの業績と足跡を残しておられます。残念なことに、この3年の間は、病魔と闘いながら、研究を推し進めなければならない苦しい日々をお過ごしでした。昨年後期には、日本学術振興会の派遣研究者として、ソウルの聖公会大学で「日本現代史」を韓国語で講義されていましたが、先生にとって、恐らく最後の充実された日々であったのではないかと推測されます。

思うに、人間の一生とはどれだけ長く生きたかということだけで、決してはかるべきものでなく、どれだけ生きがいのある充実した生活を過ごせたかで、はかるべきものなのかもしれません。

先生を失うことはわが学部にとって、大きな損失ですが、先生が日頃考えていた教育・研究のあり方を大切にし、それを実現させていくことが、なによりも先生に対する最大の鎮魂だと考えます。先生は昨年のゼミ募集にあたって、こんなことを受講生に望んでおられました。「新しいことを知りたいという好奇心、それを自分自身で解釈し、方向を見出そうという努力を絶えず持ち続けてほしい。」

心からご冥福をお祈りして、「お別れのことば」にかえさせていただきます。(2004年11月23日)

2005年6月

立命館大学 小 木 裕 文  
国際関係学部長